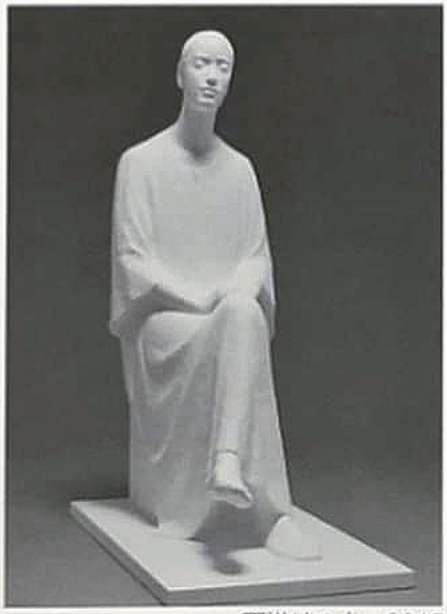
想う・2018



腰掛ける女・2017

貫頭衣

雨宮　透　Tōru Amemiya

略歴

1943年　東京都小金井市に生まれる
1953年　両親の郷里八ヶ岳山麓で毎夏冬、休みを過ごす('61頃まで)、小5の時（'55)、父・力 病死
1966年　東京造形大学彫刻科入学
1970年　新制作展初出品（現在に至る）
1973年　東京造形大学彫刻研究室修了
1975年　新制作展新作家賞受賞（'86、'87）
1977年　グループ展「彫刻6展」(～'88)
1989年　山形でも制作を始める（現在に至る）
1990年　個展（橋本画廊・小金井)、'91（小金井市公民館）
1992年　山形大学（彫塑担当）勤務（～ '09）
　　個展（工房親・東京）
1996年　夏目漱石像設置（熊本市）
1998年　個展（ギャラリーせいほう）
2003年　個展（山形県文翔館、恵埜画廊・山形市）
2007年　個展（東和ギャラリー・東京）
2009年　野口英世像設置（福島県猪苗代町）
2013年　個展（ギャラリーK AI・東京）
2015年　フランシスコ・ザビエル像設置（大分駅前）
2016年　最上義光像設置（山形市）

他、個展、グループ展多数
　現在　新制作協会会員
　　日本美術家連盟会員

## ― 今、思う ―

「金木犀　友と作品　思う今」 透

私の両親は信州、八ヶ岳の麓、富士見高原の出身で父親が小説家志望であったので、若くして上京した。戦争中、ジャワに日本語教師として派遣され、そこで病にかかり帰国後も病弱で、志なかばで早世した。母は父が遺した「子どもたちには好きなことをやらせてあげてくれ」という言葉を胸に、二人の息子を育てた。それに甘えたわけではないが9歳違いの兄と私は彫刻家となる。

父親を早く亡くした私は、小学生の頃から夏休み、冬休みになると母の実家のある信州、富士見高原で過ごしたが、これは浪人時代まで続いた。高い山々に囲まれた小さな町は、東京育ちの私には別世界であった。純朴なひと、清々しい空気、澄んだ水、食べものなどすべてが新鮮で、そこでの体験は、その後の私の自然に対する心を育んでくれた。

浪人を重ね、21歳で東京造形大学彫刻科・第一期生として入学することになる。これが彫刻修行の第一歩であり、彫刻家・佐藤忠良との出会いでもあった。

私は、大学を卒業した年、佐藤先生が所属する公募団体、新制作協会展に初出品し入選する。新制作協会彫刻部は本郷新、柳原義達、佐藤忠良、舟越保武ら7人の若者たちによって設立された歴史ある団体である。日本を代表する彫刻家たちの中に初めて、自分の作品が展示された時の緊張と感動は忘れられない。その後も出品を続け、会員に推挙され現在に至っている。

作家活動を続ける中、山形大学教育学部美術科（彫塑担当）に勤務、40歳半ばで、生まれ育った東京・小金井から東北・山形に生活の場を移し、山形と東京で活動することになる。ここでの生活は少年期の新鮮な感動を再び蘇らせ、その後の私の作品制作に大きな刺激を与えてくれた。

この「自然」に触発され生まれた作品が、ここ三十年取り組んでいる一連の「漣（レン）」作品で、簡素なコスチューム、貫頭衣（長方形の布の真ん中に穴をあけただけの、ポンチョのような衣装）を纏った女性像である。貫頭衣を纏うことで人体を単純化し、動きをできるだけ抑え、力を内に凝縮させることで、素朴で静寂な空間と緊張感を創り出すとともに、温もりと深い精神性を表現した。

彫刻の道を選んで60年、「自然から目と心を逸らしてはいけない」を心に、作品制作に取り組んできた私ですが、これからも「自然」を師に制作して行きたいと思う。

2023年11月

雨宮　透